

HITOTSUBATAGO NO. 6

ヒトツバタゴ



対馬生物研究会

January 1989

絶滅の危機せまるツシマヤマネコ

浦田明夫

この報文は、産経新聞「いきもの紀行」として10回（昭和63年5月30日～6月10日）にわたり連載されたものに若干加筆したものである。

■ヤマネコのいる島

長崎県対馬は九州本土まで 147km、朝鮮半島までわずかに53km、まさに国境の島である。古くから大陸と日本との交通上の要地であり、また美しい自然と歴史の島でもある。

生物についても大陸系、日本系、対馬固有のものが混生している。大形哺乳類のツシマジカは対馬固有の動物で、中形のツシマテンは日本系のものである。しかし対馬を代表する動物といえば大陸系のツシマヤマネコが筆頭であろう。西表島にイリオモテヤマネコが発見されるまでは、ツシマヤマネコは日本に生息する唯一のヤマネコであった。

ツシマヤマネコは東南アジアを中心に生息しているベンガルヤマネコの亜種で、この仲間はビルマ、マレー半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、フィリピン諸島の一部に普通に見られるヤマネコで、その分布は更に、中国、台湾、朝鮮、シベリア東南部、チベット、インド北部まで広がっている。このベンガルヤマネコがいつ頃、どのような経路をたどって対馬に渡来したかは未だ多くの謎につつまれている。

しかし、対馬にヤマネコが生息していることは人々には古くから知られて

いたことである。これが動物分布や分類学上世間に広く知られるようになったのは、明治の終わり頃である。英国の大英博物館に依頼されたアメリカ人 H. P. アンダーソンが明治35年から数年間日本中を採集旅行して歩き、ネズミ類を中心に動物の採集を行い、それを英国に送ったのである。もちろん対馬でも採集を行った。その中にツシマヤマネコが含まれていた。その後、注目をあびることもなかったツシマヤマネコに、筆者が強く興味をひかれたのは「もう対馬にヤマネコはいないのでは」と言われはじめた昭和30年代の終わりである。しかしその頃、対馬のだれ一人としてツシマヤマネコについて情報を提供できる人はいなかった。

■生きたツシマヤマネコを見る

昭和41年8月11日、筆者は対馬高校生とともに対馬の北部上県町志多留でキャンプしていた。朝早く、一人の生徒が私のテントにやってくる。「ツシマヤマネコがトラップにかかっている」と叫ぶ。大きく動悸する胸をおさえて現場へ走って行く。数日前から沢沿いに仕掛けていたトラバサミにかかっていた。未だ幼獣で生後3・4か月と思われたが、猛獣を思わせる精悍な顔つき、近づくと低い声で「ウッ！」とけん制する。これが野生での初めてのツシマヤマネコとの対面であった。これはいろいろな事情から、大阪の天王寺動物園に引きとられ、日本で初めて多くの人の目にふれることになった。しかし残念なことに寄生虫におかされていたらしく、約半年後死亡した。筆者のところにはその死亡通知が送られてきた。同じ頃、対馬北部で野犬に襲われた幼獣2頭が捕獲された。生後3・4か月の雌猫で、生態研究をするという事で長崎大学が飼育することになった。

そして昭和43年1月2日、対馬南部（久和）で養鶏場のニワトリを襲う動

物を捕獲するために仕掛けたトラップに大形の雄がかかった。筆者のもとに届けられたので測定したところ、体長60cm、尾長25cm、体重 4.8kgの堂々たる体格。今度は地元におきたいという県および対馬町村会のすすめで筆者が飼育を引き受けることになり、いよいよ本格的な生態研究がスタートすることになったのである。

一般にツシマヤマネコは、外観上、イエネコとほとんど区別できにくい。体は成獣ではイエネコより一回りから二回りほど大きく毛色は暗褐色のトラ毛であり、顔には2本の白線が走っており、耳は顔に比べると小さく、そして先端がとがらずにまるくなっている。また、耳の背面には必ず淡黄色の斑紋がみられる。この点がイエネコとの最も区別しやすい点である。また、眼はイエネコでは明るい所でその瞳は針状にまでなるが、ツシマヤマネコは針状にはならない。イエネコは普通「ニャーン」というが、ツシマヤマネコは筆者が飼育した延べ6頭、6年間では「ニャーン」という鳴き声を聞いたことはない。

■ツシマヤマネコを飼育する。

捕獲された雄を筆者のところで飼育しはじめて2年近く過ぎた昭和44年10月4日、山中でけがしていた雄が見つかったがどうしようかと豊玉町卯麦から連絡を受けたので、早速長崎県文化課と相談したところ、筆者のもとで治療と保護をするよう指示を受けた。最初の雄よりやや小さいが、色彩の明るい個体であった。これまでのツシマヤマネコ1頭、ツシマテン2頭の飼育に加えて、もう1頭ツシマヤマネコを飼育することになり、いよいよもって飼育代はピンチになってきた。当時、飼育代としての2百円の出費はいたかった。すでに県指定の天然記念物には指定されたものの、長崎県等からの経済

的なバックアップはなかったのである。これがある機会に新聞に取り上げられ、近くの魚屋さんや肉屋さんの御好意で毎日、魚や鳥などが届けられるようになった。経済的に全く不安のない状態になったことは本当にありがたかった。

飼育小屋に行き、給餌や観察を行っているうち、家内や子供から「変なおいがする」と言われるようになった。いつしか動物特有のにおいが衣服にしみこんでいたらしい。筆者自身は全くわからなかったが、ツシマヤマネコの糞や尿の悪臭がしみついていたのだ。おそらく筆者と接する人々は悪臭を感じていたものと思ひ汗顔ものである。以来小屋に入る時はせめて上衣だけでもとりかえて飼育管理を行うことにした。ツシマヤマネコは生肉を常食としているだけに、その排泄物は異常に鼻をつくのである。この悪臭は本当に筆舌につくしがたい。小屋は学校の一隅に設置されていたが、生徒からほとんど文句がでなかったのは、これが天然記念物だったからであろうか。

筆者のもとでツシマヤマネコの飼育が許可されたものの、何を餌として与えたらよいのか最初は心配だった。ネコ類は肉食だから、まずは入手しやすい魚を与えてみた。心配もすぐに解消し、安堵へと変わった。すぐに餌に食いついてくれたのである。与えたブリの切り身をむさぼるように食べるはじめたので一応の飼育の目途が立った。そこでその後は、サバ、アジ、イワシ、タイなどいろいろな種類の魚、そして牛肉やトリ肉を与えたがいずれもよく食べた。しかし食べたのは生肉だけで火を通したものはほとんど食べない。特に味のついたものは見向きもしなかった。

この頃、筆者は遺伝の実験のため各種のハツカネズミを飼育していたが、これがいわゆるネズミ算的に異常に繁殖するので、エサとして与えてみた。すると野生を再現するかの如く、低い姿勢から飛びかかり両前足で押えて頭からガブリ！とかみつき食べるはじめた。この他カエル類もよく食べるし、生

きた中型のアオダイショウを与えた時は、やはり両前足で前の部分を押し、頭から食べはじめた。ヘビは体を巻きつけるような行動は全くできないようだった。

イエネコは時々イネ科の植物の葉を食べるのを目撃する。ツシマヤマネコではどうだろう？と思い与えたところ、やはり食べるのである。完全な肉食のツシマヤマネコが植物の葉をむさぼるように食べるのである。しかし、食べた後の糞は一般に軟便になりやすい。これはツシマヤマネコにとっては、消化剂的な役割、もしくは通じ薬的な効果をもたらしたり、あるいは駆虫薬的な作用があるのではないかと思われる。また、ネコにマタタビと言われるよう、にネコ科の動物は大形のライオンをはじめマタタビを与えると陶酔状態を示すが、ツシマヤマネコは「猫に小判」としか思えず、反応が全くみられなかったのは不思議である。

毎日一回 300g の餌を与えていたツシマヤマネコは、運動不足も手伝ってかやや肥満の傾向が見られてきた。野生では毎日確実に餌にありつける保証はない。餌を食べない日が数日続くかもしれない。この頃から、餌を与えない日をつくることにして管理した。しかし、出張の折など長く続くと食べさせないわけにはいかない。その間は、対馬高校の生物部の諸君が毎年、代はかわれども好意的に飼育してくれたことは大いに助かったし、ありがたかった。そして、自然にできるだけ近い状態で飼育したいということから、餌を減らす（与えない日をつくる）ことや適当な運動量を与えることにした。

■ツシマヤマネコの生息地

動物を調べるにあたっては、先ずその分布を知らねばならない。対馬は面積 709km²、沖縄を含めて4番目に大きい島故、これまでツシマヤマネコがど

ここに生息しているのか、当時資料は全く無かった。以前狩猟をしたことのある人などに、いわゆる聞きこみ調査から始めるしかなかったのである。ところが意外にもヤマネコはよく見られるというのに驚いた。よく聞いてみると土地の人はヤマネコというのはツシマテンのことを言っており、ツシマヤマネコのことには「トラフ」とか「トラフノヤマネコ」と言っていた。ヤマネコと筆者が言っても返ってくるにはツシマテンのことだったのである。ツシマテンは比較的に見ることの可能な動物である。本当のツシマヤマネコは、我々の前には簡単に姿を現すシロモノではないことがわかった。こうした聞きこみ調査をもとに、全島の狩猟家にアンケート用紙を配布しその分布の調査を行うとともに、約5年間、時期を変えながら山野をめぐった。

実際に野外で見ることにはほとんどできないので、生息の目印になる糞と足跡を求めた。発見した場所を地図上にしるすと生息場所や密度がうかび上がってくる。こうしてスポットされた分布図を見てみると対馬北部では志多留田ノ浜、琴、茂木などが高密度であり、南部では久根、上槻地域が高い所であることがわかった。また中部地方では、櫛や卯麦も比較的に生息していることが判明した。これらはいずれも、広葉樹の山があり、山道を下ればそこに田んぼが広がり、そのあぜ道を通れば海岸に抜けられるような所が生息する共通点である。これは山はねぐらであり、水を求める場所となり、山麓や田んぼと海岸は餌を得るに好適な場所となっている。

■ ツシマヤマネコの生息頭数を推定する

現在対馬にはいったいどれほどのツシマヤマネコが生息しているのだろうか？

動物の調査をすると一般の人はきまって、「何頭くらいいるのですか」と

たずねる。ツシマジカ、ツシマテンしかり。ツシマヤマネコにおいてもまたしかり。数を言えば、それが自分の予想とかけ離れていようとそれで安心して納得した顔をする。しかし、人口調査（国勢調査）のように正確さを期することはとうていできないので、できるだけ近似値が出るよう最大の努力はしているものの、調査する人によって、あるいは方法によってもかなりの差の出ることはいなめない。

生息頭数を推測する方法としては、狩猟頭数から生息頭数を割りだす方法もあるが、ツシマヤマネコのように天然記念物では、これをあてはめるわけにはいかない。現在動物の行動範囲を知る最も有効的な方法としては、その動物を捕獲して、これに電波発信器をつけて放し、受信器でその電波を受けとる、というやり方がとられる。しかし、20年前は、そのような機器は一般的ではなく、また経済的にも求められるようなものでもなく、原始的だが足跡と糞を採取する方法がベストであった。対馬北部の志多留、田ノ浜の調査では雨上がりに残された足跡は、延長2 kmに及んだ。他の地域でも一夜の移動距離はやはり約2 kmと推定された。そこでこれらの区域内の糞を毎日、徹底的に採取して歩いた。ツシマヤマネコは一日に1回の排便であることから前日4 kmにある糞を完全に採取し、翌日再び採取した糞の数がその区域内の生息数になる。この調査によって4 kmの生息数は2頭ということになった。対馬の総面積のうち、人家や道路など生息に不適當な環境を引いて250～300頭と割りだしたのである。その後、20年ぶりに昭和60年から3年間、再調査を行ったが、その激減ぶりは、驚きを抑えようもなかった。20年前の3分の1、100頭前後に落ちこんでいると推定された。

■繁殖の試み

ツシマヤマネコの繁殖については、これまで断片的な筆者の報告があるにすぎず、詳細なことはわかっていない。筆者が飼育していたツシマヤマネコは2頭とも雄だったので、雌が捕獲されるのを待つ以外、繁殖の機会はなかった。

かつて筆者は、阪神パーク動物園でヒョーの雄とライオンの雌の種間雑種「レオポン」を見、この雑種を作出された赤木一成氏にも会っていろいろ苦勞話を伺った。そこでこのような種間雑種ができないものだろうか、昭和44年3月、ツシマヤマネコにイエネコの雌を同居させることにした。まず1か月間の見合いの期間をおき、同居させたが「結婚」につながるような行動は全く見られず、互いに無視しているかのようだった。餌を与えると、まずイエネコの雌が食べ、ツシマヤマネコが餌に近づこうとすると、イエネコは威嚇した。ツシマヤマネコはいつも残りものを食べていた。力関係でイエネコが上なのか、女性上位なのかはわからない。この同居生活は、イエネコの数回の発情にもかかわらず、交雑の試みは成功しなかった。

当時長崎大学ではツシマヤマネコを2頭飼育しており、筆者は1頭ずつ交換し、繁殖実験をすることを提案した。そしてこの提案を受け入れた長崎大学は、昭和45年4月2日、ツシマヤマネコの雌を搬入、筆者の飼育していた雄「ジュリー」を持ちかえり、長崎市と対馬でペアリングが始まった。この雌は昭和41年に捕獲された幼獣で「ハマ」と名づけられていたが、昭和46年7月6日、繁殖実験の途中、残念ながら死亡し、その機会のすべてを失ってしまった。長崎大学で飼育した雌雄もまた繁殖はできなかった。

野外での繁殖は全く観察されていないが、これまで発見保護された幼獣から推定して、およそツシマヤマネコの発情期は2月から3月であろうと考え

られる。この頃の糞の分布と量が、他の時期に比べて多く、これまで単独行動をとっていた雌雄が、一緒に行動することを推測できる。妊娠期間は、チョウセンヤマネコの観察例では60～63日（イエネコもほぼ同様）である。出産期は5月上旬～中旬、この時期に生後間もない幼獣がこれまで5例知られている。一方、昭和45年9月12日に幼獣の雄が見つかり、翌年4月26日死亡するまで筆者が飼育したが、この個体は8月生れのものとして推定された。出産は年1回、産児数は2頭で、1頭または3頭も希にあると考えられる。

出産場所もこれまで数か所発見されている。昭和42年5月8日、上槻では林道から5 m余下の崖になったススキの根元で、ここで2頭の幼獣が発見されている。椎根と芦見では、シイタケの乾燥小屋、昭和45年6月1日、瀬では木の洞であった。また卯麦、仁位の場合は木の洞および岩の下穴であったが、このように雨が直接あたらないようなところなら、人家の近くでも繁殖は行われている。また、産座は、特別な巣のようなものはつくらない。一方佐護では、ヤマノイモの掘りあとの穴に産んでいたが、危機を感じたのか翌日は場所を換えていた。

■食性を調べる

ツシマヤマネコの野生での行動を見ることはほとんど不可能であろう。筆者自身20年以上調査していてもなかなかその機会に恵まれない。しかし、実際に目で行動を確認することが出来なくても、われわれにはいろいろな形で情報を提供してくれる。その一つが足跡である。足跡はイエネコと同じく四つのツメ跡がつく。追跡してみると、行動は単独で、一日のうちでもその行動は日没後から午後10時頃まで、時には明け方も動いている。テリトリーは決まっているが、特に巣は作らず、くぼ地や木のほこら、岩の下などを休息の場

としたり、ねぐらとして利用しているものと考えられる。

一見どう猛そうだが、山野で人を襲うようなことはない。ツシマヤマネコ自身が身に危険を感じたときは、素早くブッシュの中に逃げ込むか、木に登る。かつて対馬のハンターはこの習性を利用してツシマヤマネコが獵犬などに追われて木に登ったところを狩猟していたという。

筆者は赤外線センサーを利用して、行動時間を調べたり、写真撮影を試みているが、これからは、本格的に行動を追跡するテレメータとともに重要な情報を提供してくれる。もう一つの情報源は糞である。ツシマヤマネコが毎日通る道の、特に四方見晴らしのきく山の頂上の裸地や田んぼのあぜ道などに糞はよく発見される。イエネコは、糞をしたあと土などをかける習性があるがツシマヤマネコにはそれがない。ツシマヤマネコにイエネコのような糞をおおう習性があったら、ツシマヤマネコの行動解明は相当な困難にぶつかっていたことであろう。さて、この糞はツシマヤマネコの行動を知る最も重要な手がかりを与えてくれる。その一つは行動圏、行動の方向、個体の大小食性……等。特に野生での食性を知ることは、直接食べている機会を目撃するか、あるいは胃の中の内容物を実見するしかない。しかし、糞を調べればその食性のほとんどを知ることができる。それには先ず、採取した糞をアルコールでほぐしていくと、何を食べているかほぼ分かる。動物の食性には普通餌の種類、量、とり方、食べ方などが含まれるが、これらは同一種類でも産地、成長段階、季節、環境などに応じて変化するものである。

糞の内容物はよく消化されたものは残ることはないが、その中から未消化物を形をくずさないように取り出し、調べるのである。こうした方法で内容物を取り出してくれたのは、対馬高校の生物部の生徒であった。これを筆者が一つ一つを同定していくわけだが、これも大変な仕事であった。その調査の結果では、ネズミ、モグラの類でツシマヤマネコの食物の90%を占め、周

年にわたって見られた。鳥類は羽毛などが残り、これにより調べてみると鳥類もかなり食用に利用しているようである。ヘビはその鱗がみられるが、出現も夏に偏り、割合も極めて少ない。魚類もみられるが、余り多い方ではない。昆虫類はよくみられるが、直接食べたものの他、二次的なものもあるのかもしれない。また、イネ科などの植物は比較的にみられる他、シダ類、コケ類、裸子、被子植物等ほとんどみられた。

飼育下においては、実験的に、単一の餌を与える。複数の餌を与えて好みを調べる。摂取量を測定するなどの方法をとった。その結果、

哺乳類、鳥類、爬虫類（アオダイショウ）、両生類、魚類など対馬産の動物を与えたが、これらを長期間与えても特に栄養障害をおこすようなことはなかった。カエル類はよく食べたが、糞の分析結果では未消化物として排出されることはほとんどなかったことから、野生では食べてはいるものの、我々が確認できなかったものと思われる。また食性好みについて、延べ4頭のツシマヤマネコで比較してみたが、成獣、幼獣、時期、体調等によって異なり、はっきりした $A > B$ の関係はなく、 $B < A$ になる場合もある。同一物を長く与えていて、他のものを与えると新しいものを先に食べる傾向はある。

摂食量は、成獣では 300～400g が必要である。一日にこれだけの量を自然の中で摂食するには、相当量のネズミ、モグラの類が捕獲されていることになる。

植物性のものは、イネ科植物はよく食べるが、ほとんど未消化物として排出される。本来肉食動物には炭水化物を分解する酵素が少ないのではないかとと思われる。

■保護への提言

ツシマヤマネコを本格的に調査しはじめた20年前は 250頭を下だることはあるまいと推定し、これくらいの頭数であれば、まず絶滅することはないと考えていた。対馬ぐらいの大きさであれば、100～200頭でほぼ種を保つ実数といえよう。しかし、この数字を割ると極端に生息数は減少してしまう。トキやコウノトリがそれであり、また対馬では、キタタキがその例にもれない。生息数が減ると、まず雌雄の出会いが少なくなり、交尾の機会が減少する。たとえ交尾が成功しても、長い間のうちに近親繁殖の弊害が表われ、虚弱体質の個体が生じやすくなり、急激に種の絶滅へとつながっていく。

聞き込み調査で、戦前には人家近くに現れニワトリを襲ったという話をよく聞いた。このことを記憶している人は多くて、保護のためにニワトリを餌づけすると、またニワトリを襲うようになるのではと農家の人は心配する。知り合いの古老はかつてツシマヤマネコを捕る猟師だった。その肉が非常に美味だったことが捕獲の理由でもあるが、対馬では当時は重要なタンパク源であったと考えられる。しかしその毛皮は比較的価値は低かったようである。減少の理由はいろいろと考えられる。その一つは狩猟による捕獲、猟犬の移入、戦後の極端な農薬の利用によりツシマヤマネコの餌が不足したこと、また野犬の増加が幼獣に被害を与えた。それとともに、我々の前に大きな問題としてのしかかってきたのは、森林の伐採である。植林するために広葉樹が切られ、ツシマヤマネコの住み家が奪われた。そして対馬のすみずみまでいきわたった道路で、ツシマヤマネコの交通事故の例が見られるようになった。こうしたいくつかの原因が重なりツシマヤマネコの環境はしだいに悪化し、その生活をおびやかしていったのである。

ツシマヤマネコは昭和41年に長崎県指定天然記念物に、昭和46年に国の天然記念物に指定昇格、捕獲などの規制が行われているが、ツシマヤマネコの激減の原因は複合的なものであることは明白である。生息動向、推定生息数

のレベルからみて、まず、イリオモテヤマネコやニホンカワウソと同様、絶滅にひんしている動物のリストに加え重要な保護動物として指定する必要がある。筆者のこれまでの調査から、本来は対馬全島を考えるべきだが、特に分布密度の高い北部を特別保護地域として設定すべきである。そして、キタキ絶滅の二の舞をしないよう、広い範囲を指定する必要があるだろう。そしてこの保護地域では好適な環境を維持するため、広葉樹を育てる一方、近くに非耕作地を造る。そして水源を確保する。さらに、現在一部では実施されているが、交通事故へのドライバーの注意を促す標識などの設置を拡充する。次にハンターによる誤射殺の皆無、勘ぐれば故意に射殺した形跡があるがハンターのマナーの向上を待つ以外にはない。そしてツシマヤマネコが重要動物でありこの地域の人々へのけいもうなど必要であろう。

生息頭数が 100 を割ようになると、種の保存が困難になるので、人工増殖を図ることも大切であろう。地元で増殖に成功すれば、島興しの起爆剂的役割を果たしてくれるものと考えられる。そして行政はツシマヤマネコの貴重さをもっと認識し、今までより以上に積極的に保護策を打ちたてて欲しいものである。

(対馬高等学校)

対馬の植物をみつめて

岡部虎男

対馬に生まれ育って80年になります。これまで対馬に生えている植物を調査研究してきましたが、そのなかでも特に印象の深いオウゴンオニユリ、ゲンカイツツジを中心に話をすすめてみようと思います。

オウゴンオニユリとの出会い

私がオウゴンオニユリを調査研究するようになったのは、小学校から中学校時代の友人である逗子市在住の秋田甫氏からの昭和42年2月18日の私信によります。秋田氏は当時、みちくさ会という山野草の会に入っておられそこでユリの研究者としては著名な清水基夫氏より対馬に自生があるオウゴンオニユリの入手をたのまれ、友人である私に探してくれるように依頼してきてきたわけです。それまで対馬にそのようなユリがあるということについては文献で見ただけでしたが、実物はみたことがありませんでした。早速、自分の住んでいる厳原町を調査してみましたところ5戸の家庭で栽培していることがわかりました。又、5戸の家庭をくわしく調べてみますと2つの系統があ



ることがわかりましたが、いずれもあとの調査で上県町の女連（うなつら）で発見されたものであることがわかりました。

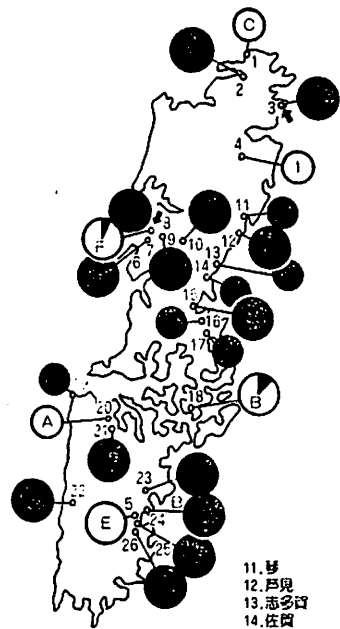
私が実際にオウゴンオニユリの花を見たのは昭和42年の7月で、厳原町宮谷に住んでおられた川口正勝氏の庭であり、黄金色に咲いた見事なユリに感激しました。そのとき川口氏にオウゴンオニユリの種子をとることをお願いしたところ、こころよく引受けていただき有難く思いました。この種子は同42年10月29日に川口氏から大小2個のさやをもらいうけ、大きいほうは清水氏に送り、小さい方を私が栽培してみることにして手元におきました。さやを割ってみると2、300個の種子が入っていましたが、胚のはっきりしたものは20個位しかありませんでした。これを大畑博氏（対馬での植物栽培の第一人者）とわけ播種したところ、私のは同年11月11日に11本発芽しました。大畑氏のものも発芽しています。黄花のオウゴンオニユリが咲くものと期待して大事に栽培を続けたところ、そのうちの7本が昭和45年7月に開花しました。残念ながら全部朱赤色のものがっかりしましたが残りの4本に期待をし次の年をまちました。翌年7月に開花しましたが期待を裏切り、全部朱赤色でした。このことで実生は断念しましたが、オウゴンオニユリは2倍体であり、朱赤色のオニユリから突然変異で発生したことが裏づけられました。実生栽培を数年続けたことは無駄ではありませんでした。実生栽培と並行してオウゴンオニユリが発見地女連に自生しているのではないかと思い、現在対馬高等学校の浦田明夫氏に調査をお願いしましたところ昭和42年7月18日國分英俊氏とともに調査に行かれ、その結果自生のものは発見できなかったとのことでした。しかし、民家には栽培されているとの事でムカゴと小形の球根をもってきていただきました。このムカゴは同年8月19日に清水氏に送りました。又、同43年に対馬町村会の松原氏、対馬高等学校の浦田氏、朝日新聞の藤吉氏が再度自生地調査をされたが発見

できなかったとの事です。私もこのときの調査に参加するつもりでしたが体調をくずし残念ながら行くことができませんでした。

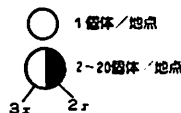
話をもとにもどしますが、昭和42年(1967)年8月31日、私の長男の高校時代の同級生で女連のとなり地区の久原に住む居村一久氏を通じてオウゴンオニユリの保護をお願いするため、"オウゴンオニユリについて"というパンフレットをつくり、女連、久原の栽培者に配布して貰いました。

さて、オウゴンオニユリの自生地が上県町女連であることについては今は疑う余地もありませんが、発見地を特定するまでは苦労しました。というのも自生地には諸説があったからです。

とくに白岳発見地説には調査にだいぶ時間をついやしました。調べてみると島内に白岳と名前のつく山が6ヶ所もあったのです。しかし、中尾信吉氏が昭和6、7(1931、1932)年ごろ発見したということがはっきりしていましたので、中尾氏の遺族の方と面会し女連産であることを確認しました。他にも上県町仁田、峰町三根でも自生があったという『朝日新聞』の記事(1968年7月28日)もありますが、実際は残っておらずはっきりしたことはわかりません。



- 1. 野田七田 (1961)
- 2. 大淵
- 3. 泉(オウゴンオニユリ発見地)
- 4. 湯ノ森
- 5. 鹿野(高木系)と七田(中尾氏系)の交雑地
- 6. 女連A
- 7. 女連B
- 8. 女連サナア(オウゴンオニユリ発見地)
- 9. 久原
- 10. 鹿見
- 11. 夢
- 12. 戸見
- 13. 志多野
- 14. 佐岡
- 15. 宮
- 16. 千尋塚
- 17. 湘武
- 18. 万岡
- 19. 延崎
- 20. 野崎
- 21. 口形
- 22. 榎根
- 23. 小羽
- 24. 白旗
- 25. 久田山
- 26. 新船院入口



(A, B, C, E, F各タイプあり)
 ●オウゴンオニユリの発見地
 対馬のオニユリ(2倍体, 3倍体)とオウゴンオニユリの分布(野田昭三 1978)

昭和52年(1977)年に機会があり野田昭三氏(大阪学院大学教授)縫田氏(オウゴンオニユリの3人目の発見者)と女連で調査をしたところ、オウゴンオニユリの最初の発見は100年以上も前にさかのぼることがわかりました。一番新しいオウゴンオニユリの発見は縫田氏が昭和24年女連のサナデ山で採集したもので、現在も毎年咲いています。

対馬のオウゴンオニユリの自生地は他にも上対馬町にもあります。これを知ったのは、昭和46(1971)年9月に対馬町村会の事務室で、上対馬町にオウゴンオニユリの自生地があるということ、当時、上対馬町の町会議長であるかたが話しておられるのを聞いたのがきっかけになります。まだ自生地があるのなら大変貴重であるので調査し、天然記念物にでもしてもらい保護しようと考え、当時、対馬町村会の事務局長であった松原隆夫氏(故人)と相談し、いろいろ準備もしました。昭和47(1972)年に上県町の教育委員会の方に松原氏が連絡をとり、写真撮影をお願いしたところ、7月15日に職員の方が数人で行かれたとのことでした。その時はまだ会開花しておらず、開花してから写真を撮ろうと17日に再度行かれたそうですが全部掘りとられていたそうです。蕾からみてオウゴンオニユリであったことは間違いなかったそうです。

さて、掘りとられてしまったといってもあきらめきれず、珠芽がおちて何年後かには必ず花を咲かせるものができるはずと考え、地元の人案内で昭和52(1977)年7月29日に由井正紀氏(福岡在住)に同行を願い調査に行きました。とうとう発見したのです。波うちぎわから15mくらいのところで他の植物のなかからわずかに顔を出し開花しているオウゴンオニユリを……。感激でした。珠芽を4個採集し、染色体調査のため2個は野田氏に、2個は私の手元において栽培することにしました。これは順調に生育し、昭和55(1988)年から毎年美しい花を咲かせています。それ以来

上対馬町の自生地には出向いていませんが、残っていると信じています。

上対馬町のオウゴンオニユリの特徴でもある斑点が女連のものにくらべ大変小さく数も多いこと、できる珠芽の数が極端に少ないことで、女連のものと区別することができます。対馬のオニユリは2倍体のものが多いため、今後他の場所でオウゴンオニユリを見出すこともできるでしょう。

他に対馬で発見されているオニユリの変異は、斑点のないもの、黄覆輪のオニユリがあります。黄覆輪のオニユリは私の手元にあり、数本に増えていきます。しかし珠芽による繁殖も大変悪く、葉緑体のないものが多数です。これも貴重なものですから大切に保存、栽培したいと思います。

対馬の野生ツツジ

対馬に自生している野生ツツジは、ゲンカイツツジ、カラムラサキツツジ、チョウセンヤマツツジ、コバノミツバツツジの4種とシロバナゲンカイツツジ、シロバナコバノミツバツツジの2品種が知られています。私がツツジの栽培に本格的にとりくみはじめたのは、次男が昭和38(1963)年に白岳から1株のチョウセンヤマツツジを採集してきたのがきっかけになりました。

そのころ、チョウセンヤマツツジは対馬の園芸趣味者のあいだではイワツツジと呼ばれており、最近まで私も、イワツツジの名前をつかっていましたし、自生している状態から考えてまことによい名前であると、今も思っています。これ以来チョウセンヤマツツジばかりでなく、対馬のツツジの仲間が私の鉢植えの中に混じってくるようになりました。

シロバナゲンカイツツジとの出会い

昭和44(1969)年に2系統の大変めずらしいシロバナゲンカイツツジの苗と1系統の種子を友人から手に入れることができ、種子は同年11月10日に播種し、フレームで管理したところ約30日で発芽しました。私のねらいはシロバナゲンカイツツジの苗を多量に得ることでした。発芽した苗をよく観察すると、1本1本、葉の色が違うことに気がつきました。桃花系は幹が赤茶色で葉も緑が濃く、白花系は、幹、葉ともに薄緑色をしているのです。はじめてツツジの種子をまいたのですが、よくみわけることができました。桃花系と白花系の発芽の割合は1:1くらいでした。そのころは白花のみを目的としておりましたので桃花系のものはピンセットで抜きとり、白花系のみを残しましたが、最近になって桃花系の実生のなかから変化のあるゲンカイツツジができることに気づき、おいしいことをしたと思っています。

昭和45(1970)年には、シロバナゲンカイツツジの異系統のものを交雑させ100%シロバナゲンカイツツジをつくることに成功しました。もちろんこのときは袋かけをしたことはいうまでもありません。栽培法なども工夫し、初花が咲いたのは830日目であり、そのときのよろこびは何ものにもかえがたいものでした。

昭和50(1975)年3月、昭和45(1970)年に交雑させたシロバナゲンカイツツジのなかに小型の花が咲いているのを妻を見つけました。私は栄養不良で花が小さいのであろうと思っていましたが、翌年3月もまた小型の花がさきました。花型は普通のゲンカイツツジと違って波打ち咲きというか変わった花で、花径2.5cm程度、めしべ、おしべの長さは普通のものと同じなのでとくに長く見えます。また、花は日がたつにつれ緑をおびてきて秋まで残るので、小さい花のなかに大きなサヤがみえ奇妙な格好です。品種名を”ミドリゲンカイ”とつけて愛培していますが、私が作出した最高

傑作であると思っています。この他にいろいろ変化のある花もできました。

ゲンカイツツジは秋になると美しく紅葉しますが、シロバナゲンカイツツジは黄葉します。色素の関係でしょうが面白い現象だと思っています。

チョウセンヤマツツジのこと

チョウセンヤマツツジは大陸系のツツジであり、日本での自生は対馬のみです。対馬での分布は南は竜良山山頂の岩上に、厳原の立亀岩では標高30mくらいのところに、白岳山の岩の上部と周辺の岩に、美津島町白山の岩の上に、上県町仁田の川岸にというようにだいたい全島にわたっています。

私は昭和46(1971)年当時、チョウセンヤマツツジの自生地は白岳のみと思っていました。友人から上県町の仁田川の川岸に、地元の人がカワツツジと呼んでいる落葉性のツツジがあるということを知り、同年4月仁田川に調査に行きました。自生地は出水でもすればすぐに水没するようなところで、中には根が水の中に入っていると思われるようなところに生えているものさえあります。地元の人がカワツツジと呼んでいるのは当を得た名前と感心しました。ほとんどのものが蕾をつけていましたが、種の確認までできないので3株採集し栽培することにしました。これが仁田川のチョウセンヤマツツジとの出会いです。

栽培をしてみますと、白岳のチョウセンヤマツツジと仁田川のチョウセンヤマツツジの違いが目につくようになってきました。まず葉ですが、白岳山のものはほとんどが丸葉かそれに近い長楕円形をしているのですが、仁田川のは長葉のものがほとんどです。花も仁田川のは花筒が白岳のものにくらべて長く、3年間調べましたが花の咲く時期が14日違います(同じ鉢の中で栽培)。これは違った環境で生活してきたためにおこったわずかな種内変化とも思われますが、さらにくわしく調べてみたいと思っています。

いろいろな文献をみると、対馬に自生するツツジ科のなかにヒカゲツツジ、クロフネツツジ、ミツバツツジ、サツキ、ヤマツツジという名前がでてきますが、今までの調査ではこれらのものを見出すことはできませんので、記載のあやまりではないかと思っています。

セッコク

私はセッコクの変わり物が好きで、ずい分前から栽培していました。なかでも対馬産の変わり物には愛着を感じています。対馬はセッコクの自生は多かったのですが乱獲がたたり、自生地ものは危険な岩上、あるいは樹上にしか残っていないといわれています。私の家は厳原町のまん中にありますが、庭の灯籠、マキの木では自然に発芽し、徐々にではありますが増えています。セッコクの花はほとんどピンク系で、白花のものはまれにしかみることができません。昭和25(1950)年に大畑博氏が美津島町の山林で採集したセッコクのなかから、偶然にごく薄い黄色の花を咲せるものが見つかりました。秋の夜の月に近い色でしたので、私が”明月”と名前をつけました。この花は年により花の色の濃さが変わります。どうも冬の気温が関係しているようで、今までの観察では、寒さの長い年は黄色が濃く、暖冬の年には薄くなるようです。しかし、はっきりした原因はまだわかりません。

現在、私が栽培しているセッコクの仲間は多く、1年中花がたえることはありません。

今まで私が栽培してきた植物を、思い出をまじえながらのべてきましたが対馬にはまだまだ変わった植物も多く、これからどのような植物に出会えるかと楽しみでなりません。

対馬の昆虫類

杉 憲

(1) 対馬の昆虫類

対馬の昆虫類と一口に言っても蝶・蛾・セミ・トンボ・甲虫等々多種多様である。ここでは比較的わかりやすい蝶類から述べ、他については簡単に述べることにする。文中なるべく専門用語の使用は避けたが、難解なものについてはその都度説明を加えた。

①蝶類

現在対馬で採集されている蝶は85種であると記録されている。しかし、85種すべてが島内で世代交代をくり返している土着種ではなく、17種については秋風や台風など季節風に乗って南方から飛来し、冬には死滅してしまう迷蝶としての記録である。

これらの蝶85種は下表のように8科に分類することができる。ここでは各科の特徴と代表種について説明してみよう。

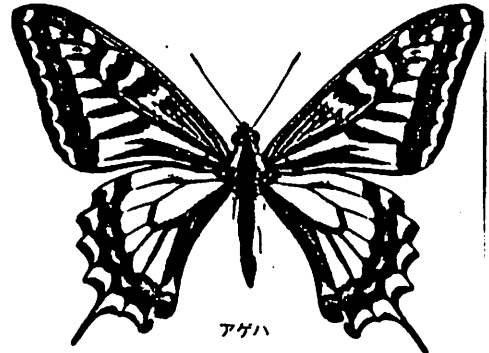
1	アゲハチョウ科	10 種	5	マダラチョウ科	3 種
2	シロチョウ科	9 種	6	タテハチョウ科	21 種
3	シジミチョウ科	23 種	7	ジャノメチョウ科	6 種

4	テングチョウ科	1 種
---	---------	-----

8	セセリチョウ科	12 種
---	---------	------

1. アゲハチョウ科

大型～中型の子の科の蝶はほぼ一年中見られる。右図の「アゲハ」をはじめ漆黒の地に金緑色・金赤色の斑紋を持つミヤマカラスアゲハや、



夏にひときわ大きな黄斑を持つモンキアゲハに代表される。夏の陽だまりの中、多数群れをなし湿地で吸水している姿は、本当に美しく優雅なものである。

2. シロチョウ科

キャベツの大害虫であるモンシロチョウに代表される本科の蝶は、春一番に出現するものの一つで、早春のころその弱々しい羽根にまだ寒い風を受けて飛ぶ姿には心ひかれるものがある。本科の中には対馬特産種であるタイワンモンシロチョウが含まれるが、これについては後節でくわしく述べるのでここでは「ツマキチョウ」を紹介しよう。

この蝶は4月中旬～5月下旬にかけて畑から山ぎわにかけての低地を飛ぶ小さな蝶で、このころモンシロチョウより少し小さめの蝶の5頭に3頭は本種である。（蝶に限らず昆虫類は1頭・2頭



と数えます。) 両前翅の先端はとがり、そこが黄色(♀は白色)なのでこの名がある。裏面は苔むした石垣模様で、春風に桜が散る様とあいまってとても情緒のある蝶の一つである。

3. シジミチョウ科

シジミ貝に似ているところからこの名前をもらったこの科の蝶たちは、その名のおり小型の蝶だがそのカラフルな色彩はタテハチョウ科に次ぐものと言える。多種にわたっているので年中見られるものや一時期だけ発生するもの等、その生活史もまた多彩である。この科には対馬特産種のツシマウラボシシジミが含まれるが、これについては後に譲るとしてここでは生活史のおもしろい2種の蝶について説明を加えてみることにする。

まず「ゴイシジミ」という蝶であるが、本種は裏面に



ゴイシジミ 裏面

基石模様を持つかわいい蝶で、島内の竹林やササ林には必ずと言ってよいほど生息している。しかし、日陰を好むこの蝶は実は肉食蝶なのである。と言っても幼虫時代の話で、この幼虫は竹やササにつくアブラムシ（アリマキ）を食べて育つ。その成虫の愛らしき姿からは想像もつかぬ幼年時代を過ごすこの蝶は、まるで現代をしたたかに生きる女性の一面と何か相通じるものがあるような気がする。（女性の皆様、ごめんなさい。）

次に紹介する蝶は何の変哲もない小さな黒い蝶、その名も「クロシジミ」という蝶である。この蝶もやはり、その幼虫時代に変った習性を持っている。本種の親はその卵をアリマキやキジラミ群の中に生み落とす。ふ化した



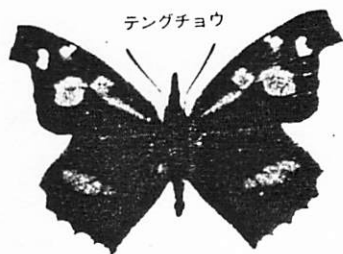
クロシジミ

幼虫は彼等が出す分泌物をなめて暮らしある程度成長するとクロオオアリにくわえられて彼等の巣に入る。ここで幼虫は彼等から養分をもらい、そのお返しに甘い分泌物をアリに与えて生活する。

特に変わった習性を持つのはここに紹介した二種だけではないが、本シジミチョウ科が変わり種の多い科であることは確かである。

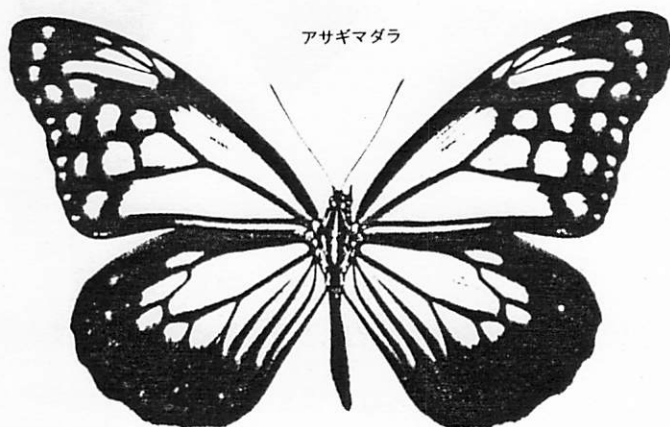
4. テングチョウ科

本科は本種一種で構成されている。名の由来は、図のとおり口吻（口のくだ）を左右からつつむ突起が天狗の鼻のように見えるところからである。山路の枯れた小枝の先などでよく日光浴をしている姿は日本独特の感性で「わび」「さび」に通じるところがありなかなか風流なものである。分類学的には原始的な部類に入る。



5. マダラチョウ科

本科はほとんどの種が南方系の種であり日本本土に土着している種は「アサギマダラ」一種である。他の蝶は迷蝶として採集されているものがほとんどである。



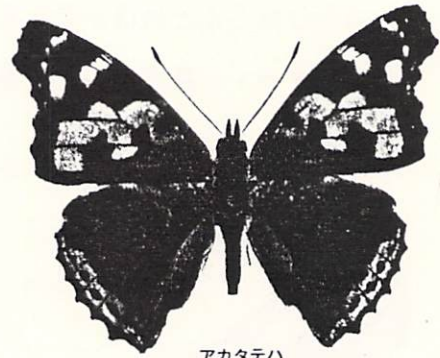
大型種で構成される本科は優雅な飛翔をするものが多いが一度おどかすとほぼ直線的に舞い上がり二度と採集できないという習性を持っている。

また対馬では記録がないが沖縄などで採集されているオオゴマダラ・オオカバマダラ、対馬でも迷蝶として採集されたスジグロカバマダラ等は、大陸間の海を渡ったりする旅行蝶としてあまりにも有名である。

6. タテハチョウ科

日本の国蝶オオムラサキに代表されるタテハチョウ科ほど千変万化の科はないと言える。太い胴体と力強い筋肉を持っており、迷蝶としての記録も多い。

ここで紹介する「アカタテハ」はどこにでもいる蝶である。冬の暖かい日校舎の窓や体育館、あるいは日だまりの中で日光浴をする本種を見かけられた人も多いと思う。成虫で越冬する蝶なのである。本種の幼虫はクサマオ類の葉を食べる。早い話がイラクサ（イガイガ）刺されたときにもんでこする草「ボンボン草」である。あの葉が二つ折りにたたまれ、白い葉の裏をのぞかせているとき葉を開いてみるとその中に本種の幼虫もしくは蛹を見ることができるだろう。モンシロチョウに準じて飼育観察のしやすい蝶の一種である。学校等で教材として取り入れられてもおもしろいのではないだろうか。



アカタテハ

7. ジャノメチョウ科

陽もささぬような庭の片隅ややぶの中を夕暮れになると活発に飛びまわる蝶がいる。落ちた柿の実などに群がる、黒っぽい蝶を見たことがないだろうか。



ウラナミジャノメ

裏面

か。彼らは羽根の裏に蛇の目の模様を持っているところから、ジャノメ蝶と呼ばれている。あまり目立たないがよく見るとその模様は実に渋く日本の伝統美を見るかのようである。よく見かけるのは「ウラナミジャノメ」（左図）で薄暮のころツンツンと飛ぶ姿は一匹狼の流れ者

といった感がある。しみじみとその姿を味わいたい蝶である。

8. セセリチョウ科

さて最後に登場するセセリチョウ科はジャノメチョウ科に次いで目立たない種族である。その飛び方は実にせわしなく花から花へ真一文字、さながらロケット弾のごときである。最もよく見かけるのは右図の「イチモンジセセリ」である。夏から秋にかけて各種の花でみつを吸う姿がよく見かけられる。



本科の特徴としてその触角があげられる。他の科の触角はその先端がこん棒状であるのに対し、本科の蝶は先端がややとんがる形になり、やや蛾類に近い感じがする。

②その他

対馬の蝶類について簡単にその概要を述べてみたが、ここでは他の昆虫類についてさらに簡略化して述べてみたい。が、一口にその他の昆虫類と言ってもその範囲は広く蝶類どころではない。そこでここではその中でも特筆すべき点について述べることにする。

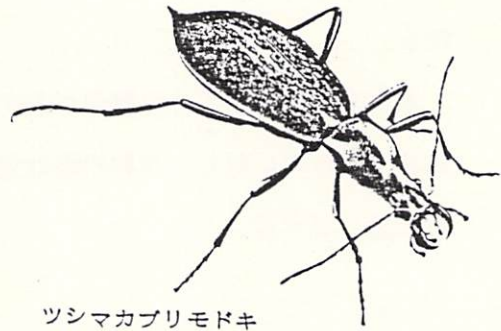
1. 蛾類

蛾類は現在確認されているだけで、対馬に約2300種ほど産している。その数や蝶類の85種に比べると約27倍にもなる。蝶とちがい夜間活動の多い蛾類は、山間部などに白いシートなどをはり、特殊な周波数（波長）のランプ等を使って集めるのであるが、一晩で標本箱に100箱近くも採れる。まだまだ

未開発の分野なので一晩頑張れば、対馬新記録はもとより日本新記録あるいは新種の発見等、数多い資料が得られるものと期待される。対馬特産の蛾類も「ツシマキシタヨトウ」など多種あるが、述べはじめたらきりがないのでくわしく知りたい方は図鑑類をひもといてほしい。

2. 甲虫類

甲虫類とはいわゆるカブトムシ・カミキリムシ等を総称するものである。対馬特産として著名なものはツシマヒラタクワガタや「ツシマカブリモドキ」等である。後者（右図）はマイマイカブリの近縁種で、カタツムリを食べる肉食虫である。吹きだまりの湿気のある落葉の下などに昔はよく見かけたが、最近ではめっきり減り保護が呼びかけられている。



ツシマカブリモドキ

3. その他

見出しの都合でその他のその他になってしまったが、最後にセミ類の一種について一言。

晩春から初夏にかけて一番先に鳴くセミは「ニイニイゼミ」であるが、対馬にはこれに非常によく似た「チョウセンケナガニイニイ」というセミが産する。日本では対馬のみに産し、晩秋のころ10月中旬から11月下旬ごろまで出現する。この時期上見坂近辺に行かれる方は耳をすませていると頭上高く「チーチー」と鳴く声を聞くことができるはずだ。普通種のニイニイゼミとは本種が長く太い体毛を持つ点や頭部が異常に大きい点などで区別できる。



ニイニイゼミ



チョウセンケナガニイニイ

これまで対馬の蝶類やその他の種について簡単に述べてきた。あまりに簡単すぎて物足りない方はそれなりの本等を読んでいただきたい。

対馬の昆虫類に関しては、近年熱心なアマチュア研究者や長崎県生物学会対馬生物研究会等々の尽力で解明が急速に進展している状態である。ここに紹介できなかったトンボ類やアリ類その他についても長崎北陽台高校江島正郎教諭や峰町志多賀小学校境良朗教諭らによって研究が進められている。もちろんその研究の一端には自然保護という重大な使命があるのである。次はそういった視野に立って対馬特産の蝶2種と、ホタル1種について述べてみようと思う。単なる文献の模写にならぬようにしたので、その分文章の読みづらさはんべんしていただきたい。

③対馬特産昆虫類について

1. タイワンモンシロチョウ

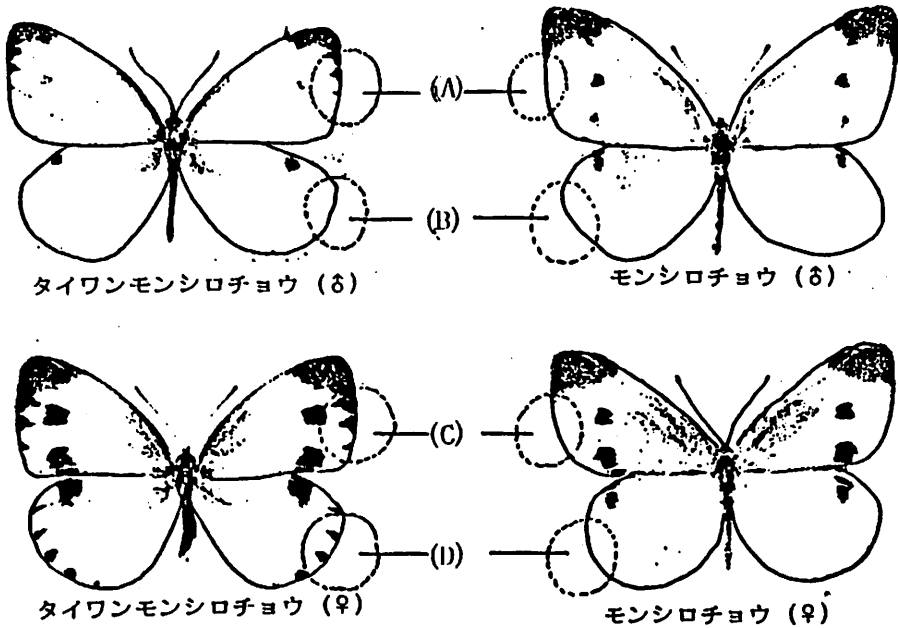
本種は昔はいたる所で見られたのであるが、最近では押し寄せる開発の波でなかなか見られなくなり、なんとか見れるのは豆酏崎ぐらいのものであろうか。本来近似種間にはすみわけの現象が見られるが、本種とモンシロチョウ間も例外ではなく、平野部・人家付近では圧倒的にモンシロチョウが多いが山間部と平野部の境目付近では逆に本種が多くなっている。

見分け方は容易で、オス(♂)では特に前翅外縁の黒斑の有無でわかる。

(A) オスでも斑紋の発達によっては、(B) に黒斑の出る個体もあるが、モンシロチョウには出現しない。メス(♀)では(C)・(D)ともに黒斑が出現することで区別できる。

幼虫はイヌガラシ・タネツケバナ等のアブラナ科植物を食う。

初めにも書いたが、マニアの乱獲などもありいずれ保護が必要となってくるだろう。



2. ツシマウラボシシジミ



現在県立対馬高校教諭浦田明雄先生によって34年前、昭和29年に上県町佐須奈山中で新亜種として発見された本種は熱帯系の蝶で、今でもこの対馬で生活史をくり返していることが不思議に思われる。和名は読んでのとうり「裏に星のような点のあるシジミ貝のような蝶」という意味である。

発見当時は佐須奈近辺の杉林にのみ生息していると思われていたが、その後30数年来の研究で、現在の分布は豊玉町和板付近まで南下している。これは相次ぐ杉林の伐採で生活場を求めての南下と考えられているが、対馬下島ではいまだ発見されていない。

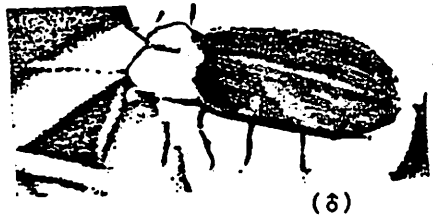
成虫も幼虫も陰湿な杉林内を好み、ヌスビトハギ（一般的にいわれるドロボウ）を食草としている。現在上県町の町指定天然記念物に指定され、保護はされているものの島外からのマニアの乱獲が後を断たず今後の保護対策が憂慮されている。

3. アキマドボタル

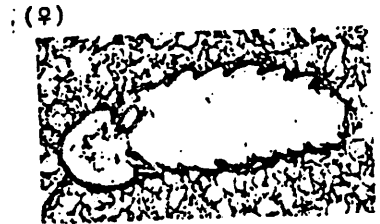
旧対馬高校（現廃中）を右に折れ20mほど行くと「阿須川のアキマドボタル」という立札に出会う。何ともなさけない話であるが今日阿須川のアキマドボタルはほぼ絶滅したと言っていいだろう。昔は町内のどこの石垣にも♀の姿は見られたものである。

さて本種はその名が示すとうり他のホタルと異なり秋になって出現する。9月中旬

から10月中旬にかけてである。他のホタルと比べて特筆すべき点はその巨体であるが何よりも♀の翅が退化して飛べずにいることである。石垣の間で光っているのはほとんどが♂の飛来を待つ♀である。



また特筆の第二点は幼虫・成虫ともに発する光が連続光であるという点である。つまり他種のようにチカチカ光るのではなく一度光ったら長時間つきっぱなしなのである。



また幼虫は他種のように水中生活をせず、やぶの中にひそみマイマイ（小さなでんでん虫）などを食べる肉食虫である。

④総括

対馬昆虫相の特異性について要約すれば「大陸系と日本系の混生地帯であり、また亜熱帯系と寒地系の混生地帯でもある。」と言えるだろう。これは先に述べた対馬特産蝶2種についても言え、また対馬産昆虫の中に「チョウセン・・・」と名のつく種の多いことから予測できるのである。

こうした対馬に住む我々は、それらの関係の解明にいそしみながら、種の保存、ひいては「自然保護」という大目標に向かって手を取り合って進まなくてはならない。それが対馬を愛する者の使命だと思ってやまない。

(鴨居瀬小学校)

キクガシラコウモリの産地

浦田明夫

キクガシラコウモリには、四国、九州などに産するニホンキクガシラコウモリと、北海道、本州などに見られるミカドキクガシラコウモリの他、対馬に記録されるツシマキクガシラコウモリの3亜種が知られている。津島産の一部についてはすでに筆者が報告しているが、その産地に見られる個体数は少ない。

今回、新たにツシマキクガシラコウモリの産地が判明したので記録しておきたい。

○美津島町城山 群生（約70匹）

昭和63年8月14日

○上県町目保呂 2匹

昭和63年8月19日

本種は洞穴性のこうもりで、対馬では廃抗などに、ユビナガコウモリ、コキクガシラコウモリに混生して見られる。今回はいずれも廃屋にみられたもので、後者は昭和48年頃までは使用していた家屋で、その後の利用はなく、コウモリの利用と相成ったようであるが、床上には糞などもみられ、ここを居住地としていることが推察できる。前者は、キクガシラコウモリとしては対馬では初めての群生と思われ、糞の多量の堆積から、かなりの個体数である

とともに、相当古くから住みついていたものと思われる。

なお、美津島町加志洞穴からもこのキクガシラコウモリは知られている他
モモジロコウモリ（昭和63年3月15日、1匹）も産することが判明している

（対馬高等学校）

HITOTSUBATAGO NO. 6

クロコノマの記録

浦田明夫

クロコノマ (*Melanitis phedima oitensis* MATSUMURA) は対馬では厳原で若干採集されているにすぎず、ジャノメチョウ科の中では希種に属する。日本では 静岡県が土着の北限で、筆者は長崎県下では長崎市住吉で店内に入っていた1頭を記録したことがある。

先般、アオサギの調査のため、美津島町の通称アオサギの森の中で、飛翔する本種を目撃した。捕虫網をもっていなかったので、帽子でおさえることができた。比較的珍しいので記録しておく。

昭和62年4月19日 1 ex.

美津島町 アオサギの森

なお、本個体は、越冬後のものではないかと考えられる。

（対馬高等学校）

野生オニユリの1品種の発見

國分英俊

1988年7月に上県郡で普通のオニユリとは花型が異なるものを発見したので報告する。

発見地は道路ぞいの林縁でせまい範囲に十数本点在していた。

特徴として、草姿は普通のオニユリとかわることはないが、花全体が小形であること、花が完全に開ききらず半開の状態であること、また、斑点が非常に少ないことなどがあげられる。もちろん他のオニユリと同様ムカゴをつけているので、オニユリであることは間違いない。このオニユリも、以前発見したフクリンオニユリと同じく種子により生じたものであると思われる。

これで、対馬で発見されたオニユリは4品種（オウゴンオニユリ、斑点なしオニユリ、フクリンオニユリ）になり、くわしく全島を調査すればまだ多くの品種が見つかるのではないかと思われる。

日本各地のオニユリはほとんど3倍体であり種子ができることはないが、対馬では2倍体のオニユリが多い。オニユリの品種さがしは、日本では対馬でしかできないようで、対馬に住むものみの楽しみではなかろうか。オニユリに目を向けてほしい。

これらの品種を集め、対馬のオニユリの品種改良でもできて、例えばフクリンオウゴンオニユリとか、斑点なしオウゴンオニユリとかできないものであろうか。将来に期待したい。

（久原小学校）

対馬におけるイシガケチョウの記録

杉 憲・小宮秀光

本年、対馬において次のように目撃・採集したので報告する。

- | | | | | |
|-------------|-----|------|----|----|
| 1988. 7. 13 | 上見坂 | 3ex. | 目撃 | 杉 |
| 1988. 8. 25 | 上見坂 | 1ex. | 採集 | 小宮 |
| 1988. 10. 2 | 上見坂 | 1ex. | 採集 | 杉 |

なお、採集個体はいずれも新鮮であり白色型であった。3日とも天気は晴れ無風状態に近かった。

7月13日については午前10時30分～午後12時10分にかけての目撃で、2exはそれぞれ図の①・②のように、かなりの速さでほぼ直線的に飛翔した。他1exについては、図の③地点（陽だまり）で飛翔をくり返しながら葉の裏に翅を開いて静止する行動をとった。その後、アオスジアゲハに追われて去った。

8月25日は図の④地点（陽だまり）で7月13日同様、飛翔・静止をくり返していたものを採集した次第である。時刻は午後12時ごろ、当日は他にもメスアカムラサキ1♀を目撃したが採集には至らなかった。

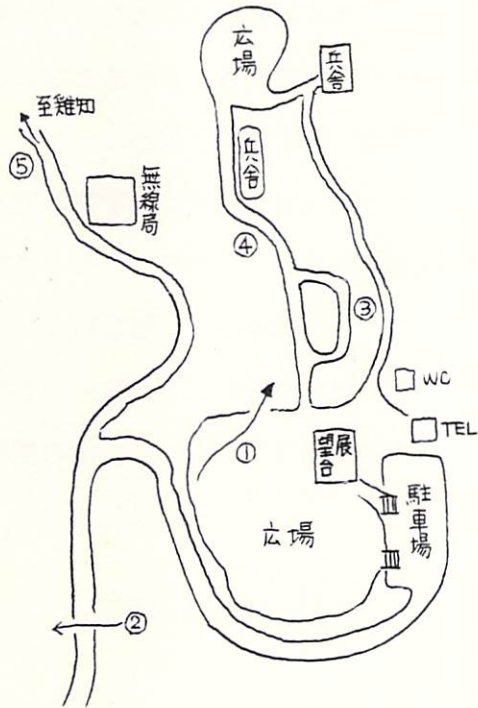
10月2日については図の⑤地点（道路ぞい、ガードレール下が少しくぼんだ繁みになっている）で、突然樹上から下りてきてくぼみの中で旋回飛翔をしているものを採集した。

本島におけるイシガケチョウの記録は、過去一例が報告されている。

1985年9月17日 上対馬町舟志 1♂ 北脇和光採集

〔蝶研フィールド：1986 Vol.1 No.3〕

これに今回の記録を合わせ考えると
分布が広範囲になり、世代交代が确实
であることから、今後蝶を研究する者
にとって楽しみが一つ増えたと言える
だろう。



(杉：鴨居瀬小学校)

(小宮：東部中学校)

ラン科植物の実生

國分英俊

ラン科植物が次々に山から姿を消している。特に対馬ではカンランはもとよりナゴラン（オオバフウラン）、フウラン（ササラン）、セッコク、キエビネ、キリシマエビネの乱獲ははなはだしく、平気で・・・を何十本とったという自慢話がとびかっている。このままでいくと遠くない将来、これらのラン科植物が島内から姿を消すと思われる。

そこで、現在私が行っているラン科植物の実生をぜひすすめたい。特に乱獲者に人気の高いナゴラン、フウラン、セッコク、エビネ類については、播種法も確立されており、実生はそう難しいことではない。又、カンランについても時間をかければできないことはない。ぜひ我々の手で増やして多くの人に無償でわけあたえようではないか。山の植物をこのまま未来に残すためにも・・・。

（久原小学校）

◎◎◎◎◎ 編 集 後 記 ◎◎◎◎◎

・昨年の11月頃は、久し振りに寒い冬の到来を予感させましたが年が改まると、うって変わって早春を思わせる暖冬になってしまいました。異常気象ということばが異常とは感じられないほど、毎年のような現象になっています。寒がり屋の編集子としては、暖冬はありがたいのですが、これは人間のわがままであって自然の生物達にとっては大変なことなのかも知れません。

・ヒトツバゴNO. 6をお届けします。発行が大幅に遅れ、会員の皆さんに御心配をおかけいたしました。お詫びします。

浦田先生と岡部先生からは、両先生のライフワークの集大成ともいべき、ツシマヤマネコとオウゴンオニユリについて論文を投稿していただきました。

杉先生には対馬の昆虫、特に蝶類についてわかりやすく解説していただきました。

いずれもが長年の地道な観察研究の努力の結晶というべきもので頭の下がる思いがします。

会誌は会員の皆さんの協力によって作られます。残念ながら今回は5名の方だけで、少々寂しい気がします。日頃メモをされていることでも結構です。2、3行でも大歓迎です。是非、投稿くださるようお願いします。

1989年が、会員の皆さんにとってよい年になるようにお祈りいたします。

*
* **ヒトツバゴ** NO. 6 *
* **対馬生物研究会誌** *
*
* 発行所 対馬生物研究会 *
* 長崎県下県郡厳原町東里120 *
* ☎09205-2-1114 *
*
* 発行日 1989年1月31日 *
*
* 編 集 境 良 朗 *
*

目 次

- 絶滅の危機せまるツシマヤマネコ . . . 浦田明夫 1~13
- つしまの植物をみつめて 岡部虎男 14~21
- 対馬の昆虫類 杉 憲 22~32
- キクガシラコウモリの産地 浦田明夫 33~34
- クロコノマの記録 浦田明夫 34
- 野生オニユリの1品種の発見 國分英俊 35
- 対馬におけるイシガケチョウの記録 . . 杉 憲
小宮秀光 36~37
- ラン科植物の実生 國分英俊 38
- 編集後記 編集部 39